28KA-am08

6年制薬剤師教育への提言~ 薬学体験型チーム実習講義にみる医学生の学習意欲向上 ~

○日置　智津子[1], 荒井　勝彦[1], 高士　将典[1], 新井　信[1]([1]東海大医)

【目的】西洋医学知識の基盤形成段階にある医学生に、臨床薬学的側面から漢方を教育コア・カリキュラム「和漢薬を概説できる」に従い習得させ、処方者であることの意識と職能向上意欲を促がす。【方法】4 年生（116 名）必修実習講義の履修項目に、臨床的側面から漢方薬を理解させるために薬学体験型チーム実習を導入した。７名でチームを組み、２チーム構成で講義を進めた。チーム内で役割分担させ、テキスト解説に従い方剤を調製し試飲させた。１）生薬、漢方製剤を視、嗅、味、聴、触覚から観察し特性を把握する。２）植物の生育や産地による特徴と薬効との関わりを学ぶ。３）加工法による製剤の違いや服用後の体感と経時変化を観察し、問題点を服用者の立場で考えることを課題とし、主要成分分析データを示し嗜好性と薬効予測などチーム対抗で討論を試みた。学習がもたらす職能意識や意欲の変化を調べるため、講義前後と進行過程で記名式調査に回答させた。【結果と考察】前調査では、漢方は伝統があり（56.2%）健康促進には適すが（49.1%）、根拠に乏しく（26.7%）疑わしく（10.3%）、医師として漢方薬の処方をあまり希望しない（59.5%）と答えた。実習後は漢方に興味を示し（96.5%）、五感を使い漢方生薬や人を観察することは大切で国際医療にも漢方薬が活用されると予測または期待し（63.7%）、治療に役立つ（83.4%）ので積極的に処方したい（58.6%）、取り入れたい（40.5%）と答え、学習意欲の向上を示した。将来の職能意識を高めることは積極的な学習姿勢をもたらすと考えられ、臨床薬学的実習は有効な教育技法と推察された。薬学教育にも職能意識向上は重要であり、同様な臨床的視点からの教育技法の考案と試行が早期学習に必要と考えられる。